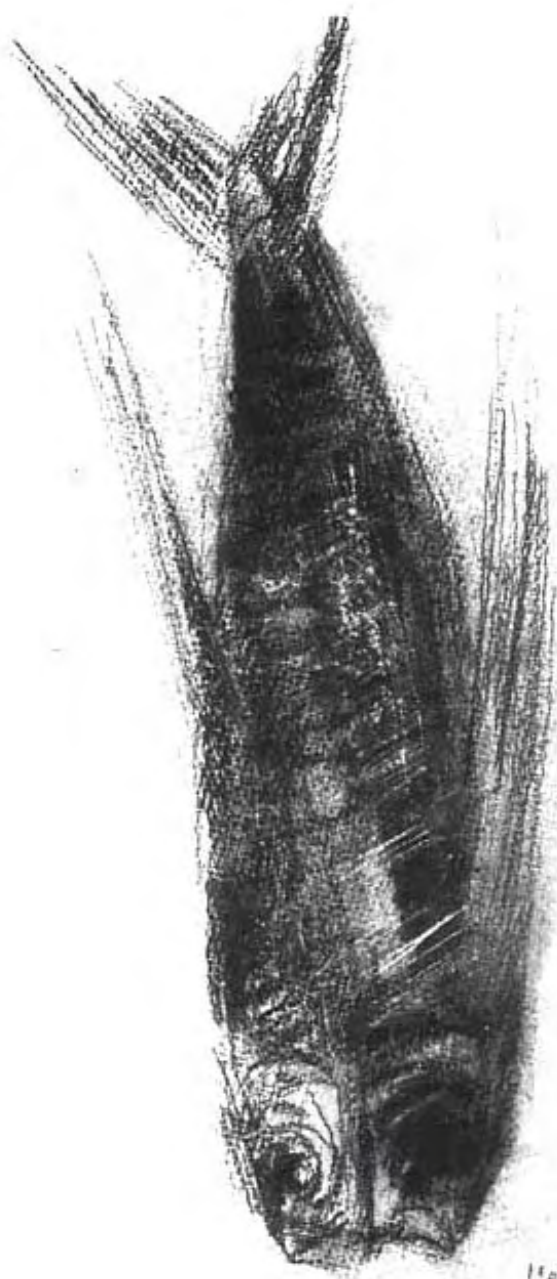


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻12月号(通巻557号)

風土



12

椿
の
実

神
蔵
器

金福寺 三句

木彫 二体 芭蕉 蕪村に 初紅葉

掛筒 に 一花の 椿 西王母

鴟 高音 蕪村の 墓を 斜交に

街中に 稲架の 匂へる 一乗寺

三条に みすや 針売る 十三夜

上ル下ル八百八寺十三夜

章鬼亡し同じ湯にゐて後の月

掌に愛す法金剛院の椿の実

盧山寺

色変へぬ松より紫式部かな

歌麿に十夜会塔婆つ立つ

大宮八幡宮 二句

神ながら八重の十月桜かな

黄落をつらぬく音の矢を放つ



竹間集

同人作品



新 涼

山路 紀子

正座して残る暑さの中にある
裂織の布裂くつくつくほふしかな
新涼や貝の形の石拾ふ
素読して了る校正夜の秋
ひとひらの羽毛降りくる晩夏かな
送火のあとの仏間に座りけり
秋蟬のこの世の終の声を掃く

生駒山

岩木 茂

国原へなだるる葛の花も散り
生駒山すこし猫背の芒かな
桐一葉桐の葉らしく落ちにけり
ある日その時の秋風奈良小路
萩に風章鬼年譜の話など
飛び立ちて大和の空を草の絮
人逝きて下弦の月となりゆけり

銀 漢

相沢有理子

因みにと切りだす輩うそ寒し
門川に主婦らさざめき芋洗ふ
秋園の家鴨寄りくる日暮れどき
銀漢や夫は仏に子は神に
風さやか基地の外れの渡し舟
台風に地震の追ひうち時計鳴る
秋茄子を焼く久々の水仕かな

白牡丹

― 野沢しの武

剥がして読む葉書のとどく四月馬鹿
濡れづめの花木の名札木の芽雨
本棚の一書逆さま入学期
亀鳴くとさう言はればそのやうな
異動理由に廃院の二字北へ鳥
鯛飯や旦夕芽木に囲まれて
連翹や昼月淡くして下弦
高く舞ひ初蝶風にもどさるる
花壇つくる妻ひとりおき暮れ遅し
芽木の夜仕舞ひ忘れの猫車

塵^ご介^み袋出しにゆく妻花海棠
銃声に乱舞のさまか紫木蓮
みどりの日妻の小さな花壇成る
有^ば刺^ら鉄^せ線^んを越え断崖へ花吹雪
凹も凸も五画の漢字夏近し
母の日の妻に犒ふ言葉かけず
バード・デー日を滴らす雨後の木々
白にしてかくも濃き色白牡丹
白牡丹凜と立ちたる鷺のごとし
風湧きて鷺の翔ぶがに白牡丹

山河集

同人作品



神蔵 器選

魼挿して琵琶湖平らや鰯雲

柿沼 盟子

雁渡る組み体操の塔の立ち
初秋のメールにひらがな多きかな
左目のごろつきとれぬ震災忌
着陸の順待つ羽田良夜かな

かまつかや姉妹の古りし帶着物

池田加代子

二日目は白蒸しの膳魂迎
新涼や彩雲高く流れゆく
合戦の大山崎のいわし雲
拝観はおこころざしや秋桜

秋澄むやガレの花文瓶透くる

南奉 栄蓮

八幡に荏胡麻の育ち油祖の像
待庵の隅の水差風炉名残

爽かに御殿造りの長庇
亡き人の花野に遊ぶ夢の中

フエリー発つ最終便や望の月

下山田美江

明石町居留地跡や鳥渡る

コスモスの聖路加看護大学校

秋簾研屋の座りどころかな

注 田楽辻子は田楽法師が住んでいた小路

コスモスの彼方や宇宙交信所

鈴木 庸子

霧深き追分駅に降り佇ちぬ

衝立にいろは絵文字の良夜かな
朝霧に育ちし高原野菜喰む
備へ置く一反風呂敷震災忌

風土独語／神蔵 器



柿ひとつ天王山をころがれり

浅田 光代

天王山は大阪府との境に近い京都府乙訓郡大山崎村にある名山、前方に桂、宇治、木津三川の合流する淀川をのぞみ、川をはさんで男山丘陵に対する標高二七〇メートルばかりであるが、天王山、男山丘陵間の狭隘部は、京都盆地と大阪平野を通るのどの部分にあり、戦略上最も重要な位置を占めている。なかでも天正十年（一五八二）の明智光秀と羽柴秀吉との戦いは有名である。光秀が本能寺に急襲して信長を討つてより十二日目、すなわち天正十年六月十二日には秀吉軍の先鋒高山右近軍が山崎町に進出、茨木城主中川清秀軍が天王山を占拠布陣してしまった。光秀は当然味方になってくると思っていた細川忠興父子、また最も力と頼んでいた筒井順慶を戦列に引き入れることが出来なかった。この時の秀吉軍は約四万、光秀軍は約一万六千であった。この劣勢に光秀は河内に討つて出ることも、京都の西の関門、山崎の狭隘部で秀吉軍を迎撃することも断念して、御坊塚に本陣を置き、円明寺―勝竜寺―淀城の線で、秀吉軍をくいとめ京都に秀吉軍の一兵も入れまいとした。

歴史の結果を素人が後からあれこれ言っても所詮は詮無いことであるが、光秀は智略にすぐれ、鉄砲の名手であった。味方が数

の上で劣勢であればあるほど、光秀軍の中から最強の鉄砲隊をよりすぐって、天王山に布陣させ、自らは主力をもつて地の利を生かし山崎に秀吉軍を迎え撃っていたら、あれほどあつてなく敗北はしなかったのではなからうか。

光秀は秀吉軍の先鋒中川清秀の二千五百になすすべもなく天王山を奪われてしまった。その時、山崎の激戦の前すでに光秀の敗戦は決定的となった。「柿ひとつ天王山をころがれり」は光秀の運命の象徴でもあらう。光代さんの最近の作品には瞠目している。

五合目の霧の中より切手買ふ

須藤美智子

この句の五合目は富士山の五合目であらう。富士山の五合目までは自動車道が通じ、バスの便もある。

私はこの句を読んですぐに安住敦の代表句「ランプ売るひとつランプを霧にともし」を思い出した。しかしこの句はこの句として存在価値がある。いかにも現代人のほつらつとした生命感、五合目という作者の確かな位置に親しみが感ぜられ、直截な抒情が快い。

小豆もぐ使ひこなせし腰踏み

工藤ミネ子

「使ひこなせし腰」とは自愛の言葉だが、なまはんに言える言葉ではない。

ミネ子さんの家は、ご主人はサラリーマンで専業農家ではないようであるが、五合目という土地柄、それ相当に農作業も行い、冬は雪掻き等、主婦の仕事は次から次へと休みがない。そしてそ

の仕事の多くは腰を曲げ踞んで行うものである。「こなす」は漢字で書けば「熟す」で「私一人で二人分の仕事をこなす」とか、「どんな役でも器用にこなす」などと使う。長い主婦としての生活は、何時の間にか慣れ親しみ熟練してうまく腰を使いこなししている。私の実家の祖母は七三歳で亡くなったが、私の記憶にあるのは何時も腰を二つ折りに極端に折っていた。現在はそんなお年寄りは見掛けなくなった。一と言えはそれだけ豊かになったのである。

蓮の実のとぶや北条一門寺

吉永すみれ

「北条一門寺」に注目した。私には解らなかつたので作者に電話した。結果、葦山町にある晴雲山成福寺であることが解った。私も何度か葦山の方へ行つたことはあつたが、伊豆箱根鉄道の葦山駅を降りて江川太郎左衛門邸の方へ行き、蛭ヶ小島から反射炉へと廻つてしまつたので成福寺は見学することはなかつたのである。成福寺は駅を降りて江川邸とは反対側、国道一三六号線に出てこの信号を渡り左折、下田方面行くと成福寺入口の標識がある。

成福寺は北条八代執権時宗の第三子正宗（幼名満市丸）が、時宗の意志を継いで正応二年（一二八九）に一族の菩提を弔うために創建された。以来代々北条一族が守つて来た。近くに岡本綺堂の名作「修禪寺物語」の執筆の元になつた「頼家の面」のある光照寺、さらに約三分で北条政子の産湯の井戸がある。この井戸は当時の北条時政の邸内にあつたものと見られ、この辺りが平貞盛の子維時から出た北条門の発祥の地であるようだ。

掲出句については何ら説明は要しないであろう。ただ私は北条一門の寺が鎌倉にあつたり、小田原（後北条）にあるものであつたらさして興味を持たなかつた。それが葦山でも観光のスポットから外れ、訪れる人も少なくひっそりと建っている。そしてそんな寺にも二百種、一百鉢以上もの蓮が栽培され、毎年見事な美しい花を咲かせているという。

二日目は白蒸しの膳魂迎

池田加代子

白蒸は小豆を入れない強飯である。池田さんは現在は横浜市にお住まいであるが、もともと京の人である。盆の二日目は白蒸の膳をしつらえて先祖の精霊にお供えするのが、京都のしきたりというか、京の伝統の風習のようである。いかにも京都らしく上品でつつしみぶかく奥床しい。そして敬虔な心の中の淋しさにほのかに優婉な趣も感じられる。

色鳥の来てまき散らす音符かな

山本 浪子

作者は頸椎ヘルニアで療養中。先月の独語で「ひたすらに睡魔を待てば朝鰻」を取り上げたが、今月の句を見ると大分快方に向かつているようである。朝食後、病床に起き直つていられるのか。今は痛みもなく、庭に來ている色鳥に耳を傾け、美しい鳴き声を楽しんでゐる。目白、四十雀、ひたき、すずめなど二種類か三種類が來ているようだ。「色鳥」という季語には小鳥に対する作者の愛情がこめられていて、美しい小鳥の鳴き声を「まき散らす音符」とは何とも楽しい。

風土集



神蔵 器選

包丁に齒こばれすこし夜の秋 高 槻 浅田 光代

コスモスを風の形に活けにけり
柿ひとつ天王山をころがれり
寛次郎の呉須の飯碗秋澄めり
別れきて胸に残りしぬのこづち
きつぱりと割るる板チヨコ雁渡し 東 京 柿沼 盟子

四万十川^{しまんと}の青のりを得てとろろ汁
その中に一花の白き曼珠沙華
絵葉書を繰るや灯火親しめり
蜉蝣や絹糸紡ぐ媼の手
カレンダー書き込み多き九月かな さいたま 須藤美智子

爽やかや時計の人形翻へる
五合目の霧の中より切手買ふ
石榴の実泳へきれずに口開く
若者のたらたら歩き厄日かな

小豆もぐ使ひこなせし腰跼め 秋 田 工藤ミネ子

ちちははを看取り葬りし木槿垣
小鳥来る村のはづれの風溜り
草叢へ光ひきずり秋の蛇
ひまはりの顎を落せる朝かな
小鳥来る何時も不在の駐在所 伊 東 吉永すみれ

高原駅の一口メモや秋燕
霧の中単線電車近づきぬ
月祀る開け放たれて仏の間
蓮の実のとぶや北条一門寺
長身をもてあましぬる穴惑ひ 岡 山 有元 文子

名水を汲む列にゐて天高し
目葉をさして夜なべにとりかかる
縁側は吾の憩ひ場月仰ぐ
平凡は幸せの内 秋 桜